

# 会津地域におけるサウンドスケープ調査研究

柴崎 恭秀

会津大学短期大学部産業情報学科柴崎研究室

「サウンドスケープ」の研究は都市を扱ったものが多い。例えば東京の雑踏のなかにある音を扱い、そこから抽出される都市的因子について音環境という視点で取り上げられたりしている。これに対して今回テーマとした地方都市で構成されるサウンドスケープは、東京などの都市部とどのように異なり、地方都市でその地域を特徴づけるサウンドスケープが如何に形成されているのか、そしてそれはその地域の空間構造に直接関わっているのか、などの疑問に対して本調査を行っている。(以下、本研究報告書のレジュメを示す。)

1. 「在りし日の音」に寄せてー研究の背景・目的ー
2. サウンドスケープ soundscape の定義
3. 会津地域サウンドスケープ調査研究の方法と方針
4. ゆらぎ、ひしぎ、さわり、そして虫の音ー基礎研究としての日本人の音環境観ー
5. アンケート調査
6. 音の収集調査ー「ハレ」と「ケ」の調査研究
7. ヒアリング調査
8. 会津地域のサウンドスケープー分析・問題提起ー
9. サウンドスケープ調査研究をまちづくりに生かすーサウンドスケープ・デザイン提案ー
10. 結びーまちの調律をめざして

## 1. 在りし日の音に寄せてー研究の背景・目的ー

「サウンドスケープ(soundscape)」とは、カナダの作曲家マリー・シェーファーが提唱した概念である(広義ではそれに基づいた研究・デザイン活動のことも指す)。日本語では「音の風景」と訳され(鳥越けい子著「サウンドスケープーその思想と実践」)、身のまわりの音を身近に、意識的に捉えようというものである。シェーファーは騒音にその研究起源を持つ。音楽家としての自身に騒音発生の責任を感じた彼は様々な実験的調査研究を行った。彼は、まちのランドマークとなるような音(「標識音」と定義)を保存するとともに、刺激的で魅力的な音風景の想像を提唱した。

シェーファーはサウンドスケープに、作曲活動だけでなくフィールドワークなどから実験的、体系的に取り組んだ。そして、次のように定義した。

**サウンドスケープ=個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境。したがって、サウンドスケープはその個人がそうした環境とどのような関係を取り結んでいるかによって規定される。この用語は現実の環境を意味する場合もあれば、とりわけそれが一種の人為的環境とみなされた場合には、音楽作品やテープモニタージュのような抽象的構築物を意味する場合もある。**

(鳥越けい子著「サウンドスケープーその思想と実践」)

### 空間分野からのアプローチ

空間分野からサウンドスケープにアプローチする場合は地域性と文化性を考慮し、これを取り入れて魅力的な空間にすることが重要である。この点で、個人がまわりの音をどのように感じるかということに重点を置いた音楽家からのアプローチと異なる。サウンドスケープを「音風景」、「音景色」として都市や地域を構成する空間的要素として捉え直し、その重要性について探っていくこととした。

近年の都市化で地方の風景も様々に変わってきた。特に車の発展はわれわれの生活を大きく変えてきた。地方都市には今や大型店舗が建ち並び、反対に中心商店街の空洞化が進む。商店の店先で聞こえていた人々のにぎわいも聞こえなくなってしまった。鳥や虫、自然の音もまち並みから排除された。代わりに車の走行音、ブレーキ音がまちの音環境を構成している。

会津地域でも同様の現象が起きている。山々に囲まれ、独自の文化を築いてきた会津であるが、昔ながらの祭事の音も年々聞こえなくなってきている。しかし、会津はまだまだ独自の音が残っている地域でもある。在りし日の音が辛うじて残り、あるいは人々の記憶のなかに留まっているぎりぎりの時点かも知れない。今回の調査では、会津地域のサウンドス

ケープを構成する音の要素と、その再構築の方法を探っていく。「音」を通して、会津地域の魅力を再発見していきたい。それは同時に、現代に生きる私たちが忘れていた日本らしさの再発見にも繋がると考える。

## 2. サウンドスケープ soundscape の定義

サウンドスケープ概念の生みの親であるマリー・シェーファーは、その定義を以下のようにしている。

**サウンドスケープ=個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境。**

これに対して都市環境そのものをテーマとしているわれわれの本調査研究では、サウンドスケープを単なる音環境とせずに、われわれの生活を充足する風景として捉え「音風景」、あるいは「音景色」という言葉を当てる。それは単独で存在し他と切り離れたものとして定義するものではなく、自然環境や都市環境、ランドスケープ、人等と結びついてある景として捉えたい。「音風景」の風景には目に見える風景のみならず、われわれが連続的に眺め、記憶で繋ぎとめる複合的な風景(シークエンス的風景)に心地よい音として捉えられる音環境を加えた環境を「音風景」と定義し、ここではサウンドスケープの訳語として当てたい。

## 3. 会津地域サウンドスケープ調査研究の方法と方針

### 1) 調査研究の方法

1. 査研究対象エリア 会津若松市を中心とした会津地域：会津若松市・会津坂下町・会津美里町・猪苗代町・会津下郷町・喜多方市・南会津町・柳津町・只見町 他
2. 調査研究の目的 会津地域における音環境の現状把握、会津地域におけるサウンドスケープの構造分析  
消えゆくサウンドスケープの記録(録音)保存、サウンドスケープによる地域活性化の提案 等
3. 調査研究方法 基礎研究：文献等による日本人の音環境観の研究、音の単位・音の性質の研究  
調査研究：会津若松市を中心とした縦断調査(「ケ」の調査)、会津地域全域でのアンケート調査  
記録(録音)調査(「ハレ」の調査)、ヒアリング調査

### 2) 調査研究の方針

1. 基礎研究：文献等による日本人の音環境観の研究

文献等から日本人の音環境の捉え方について調査する。海外との比較、日本人の音の好み・捉え方をキーワードにより掌握する。

2. アンケート調査

会津地域で生活する人が、会津の音環境をどのように感じているか、また会津の音とどのように関わっているかを調査する。音の収集調査(「ケ」と「ハレ」の調査)の裏づけとなる。

3. 音の収集調査

会津地域のサウンドスケープを構成する音を実際に現地で録音し調査する。  
調査を行うに当たって、われわれの身のまわりの音をハレ(非日常)の音とケ(日常生活)の音の二つに分け調査対象とする。

#### ハレの音調査

会津地域の祭事の音をハレ(非日常)と呼び、録音調査し保存する。

#### ケの音調査

会津地域の日常の音をケ(日常生活)と呼び、具体的な音の要素やその特徴を調査する。

- ・騒音計による音環境調査
- ・録音による音要素の調査
- ・記録による音要素
- ・音源・周辺環境の調査 等

#### 会津地域を特徴づける音調査

祭事のなかでも特に会津地域を特徴づける音風景について録音調査

- ・会津三十三箇所参り御詠歌
- ・彼岸獅子 等

#### 4. ヒアリング調査

会津地域のサウンドスケープについて、様々な環境で生活、仕事をする方々からヒアリングを行う。

- ・視覚障がいをお持ちの方 ・地域紙記者の方 ・芸術家・地域研究家の方
- ・まちづくりの活動をされている方々 等

#### 4. ゆらぎ、ひしぎ、さわり、そして虫の音—基礎研究としての日本人の音環境観

日本人はもともと自然と親密な関係のなかで文化を形成してきた。徒然草、枕草子、源氏物語、方丈記など、どれをとってみても自然と親密な関係を結んでいる記述をみることができる。各地をめぐり一干に近い句を残した松尾芭蕉の俳句には百以上の音風景を詠んだ句がある。

日本人の音感覚を表現した言葉に「ゆらぎ」がある。1/fといわれる、風鈴などの最も心地よい僅かなゆれのような音を表現する言葉である。西洋の音楽が規則的な音階による音であるのに対し、この1/fゆらぎはそれとは違って、僅かな不規則な波の抑揚が一連の音の流れをつくっているのである。例えば風鈴ではその切り口にヤスリで刻みを入れ、その部分の共鳴によってこのゆらぎをつくっている。前述のような日本人が慣れ親しんできた音環境にはこのゆらぎを含んでいる。

また、ゆらぎに対して、甲高い、破壊的な音ともいえるものに「ひしぎ」がある。ひしぎ(拉ぎ)は能楽に用いられる能管の、最高音域の音である。「1/fゆらぎ」がわれわれに安らぎを与える音であるのに対して、この「ひしぎ」は境界線の破壊的な音ともいえるものであるのに、われわれ日本人には意識が飛ぶような心地よさを与え、その魔力的魅力で今でも能の重要な部分のアクセントとなっている。

和楽器には発する音の波自体に自然がつくる音の波と同じような波形を示すものがある。人工音は一定の繰り返しの波形を描くのに対して、自然にある滝の音などは規則的な部分はなく、むしろ雑音であるノイズと類似した波形を示す。このノイズの複雑な波形の効果を持つ和楽器が三味線で、糸を固定している棹に「さわり」と呼ばれる軽いノイズを生じさせる部分がある。この「さわり」によりノイズが共鳴して三味線独特の濁りのあるような奥の深い音が生まれる。日本人が好む音にはこのような複雑な音の構造が潜んでおり、雑音と同じ波形を示す滝のような自然の音に関心を寄せる指向がある。

日本人はこのように「雑音を愛でる」という独特の音感覚を持っている。虫の音は波長域からみればやはり雑音と同様で、それを愛でる日本のような習慣は西洋には無い。菊池吉晃氏(首都大学東京大学院教授)の研究によれば日本人と欧米人で虫の音に関しては正反対の反応を示すのには脳の構造の違いが関係しているという。人間の脳は雑音もバイオリンの音も基本的には右脳で処理している。例えばココロギの音にも欧米人は他の音と同様右脳が反応する。しかし、日本人は左脳が反応しているのだという。それは日本語が母音主体の言語で、虫の音や滝の音など自然の音と母音の音の成分がほぼ同じだからということである。日本人は自然の音を意味ある言葉に置き換え、感情的な音として捉えているのである。

会津地域でのアンケート調査でも虫の音や鳥の鳴き声、川のせせらぎなど自然の音を多くの人々が「心地よい音」として捉えていることが分かった。アンケート調査の自由記述でも、自然の音に寄せる思い出や感想を数多く挙げられている。会津地域は特に自然との関係のなかで人々の生活が成り立っている地域である。日本には自然に恵まれた美しい地域が数多くある。日本のサウンドスケープはこの恵まれた自然と切り離すことはできないだろう。

#### 5. アンケート調査

会津若松市を中心とした右図の会津地域9エリアに対して市町の庁舎を中心に500部のアンケートを平成18年8月7日から9月25日の期間に、会津で生活する一般の方々に対して配布し、会津地域の音に関するアンケート調査を実施した。

##### アンケート調査のまとめ

79%の人が日常生活の中で音を意識して聞くという結果だった。しかし、「いつも意識して聞いている」という人は13%だった。常に意識して聞いているわけではなく、「窓の外から雨の音が聞こえたとき」や「虫や鳥の音が聞こえたとき」、「川沿いで水の音が聞こえるとき」などに音を意識して聞く。つまり、人々は「自然の音」がきっかけとなって、

配布地域	配布数	回収数	回収率
会津若松	100	79	79%
坂下	50	36	72%
美里	50	42	84%
猪苗代	50	32	64%
下郷	50	29	58%
喜多方	50	38	76%
南会津	50	34	68%
柳津	50	34	68%
只見	50	36	72%
合計	500	360	72%

周りの音を意識して聞いている。また、散歩や自宅で休息しているときにも周りの音は意識して聞かれる。反対に仕事中は周りの音が意識して聞かれることは少ないようだ。

以前はよく聞いていたが最近では聞かなくなった音には「虫・カエルの音」、「鳥の鳴き声」などの生き物の音で、また「赤ん坊・子供の声」、「行商の音」なども多くの回答があった。前者は意識する音として回答のあった生き物の発する音でもあり、「心地よいと感じる音」でも最も多い回答となっている。会津若松市内では市街地化による宅地造成により田畑が減っていることから、今でも聞くことはあるが以前と比べると減少した音として捉えられている。赤ん坊や子供たちの声が減った理由は様々なことが原因していると考えられる。共働きにより幼児が託児所などに預けられていることも考えられる。兄弟が幼児のお守りをする情景も今や過去の風景なのだろう。また子供たちが外で遊ばなくなったことも事実である。この調査研究と同時に、われわれは子供たちの遊び場についての調査も行った経緯がある。都心部に比べ地方の子供たちのほうが外で遊ばなくなっているという傾向があるのである。行商の音が聞かれなくなったことは会津地域のサウンドスケープとしては寂しい限りである。行商や物売りは極端に減っている。原因は無論、物流構造の変化、大型店、スーパーマーケット、コンビニなどの小売の変化が挙げられるだろう。アンケートの最後の自由記述では、行商や物売りの音を子供のころの記憶として懐かしむ回答があった。自由記述から分かったことは、例えば小名浜から来た行商が会津地域を巡り、さまざまな地域で人々の記憶に刻まれているということだった。新潟など周辺地域から会津に行商に来て地域交流や情報交換がなされていた当時の様子も伺える。

多く聞くと感じている音では「車などの車両の音」が最も多くなっている。この音は「不快だと感じる音」でも最も回答が多かった。この結果と、「意識して聞く音」の結果から、心地よい音は意識して聞いているが、車など不快な音は無意識で排除していることが分かる。この後の章で述べる「ケの音の調査」でもやはり会津地域のいたるところで車両の音は記録されている。会津地域に限らず地方では車は一家族に2、3台ある時代であり、アスファルトの道路も田畑を縫って整備されている。車の音は騒音値を極端に上げるため、これにより本来会津で多く聞くことのできる生き物の音や、川のせせらぎ、葉の触れ合う音などの自然の音を掻き消してしまう。ところが一旦これを取り除けば、田畑に集まる鳥やカエルの鳴き声、木々のざわめきがよみがえることが「ケの音の調査」であるグリッド調査を通して分かってきた。

会津地域を代表する音として意識している音には人々が交わす「会津弁・会津なまり」、「祭り」、「生き物の音・自然の音」が挙げられた。会津地域のサウンドスケープの原風景はこれらのレイヤーを重ね合わせてできるものなのだろう。人の声、ハレの日の活気、その背景として自然の風景の音が重なり合うことは会津地域のフィールドワークを行って容易に理解できた。

最後の自由記述は非常に興味深い回答があった。多くは人々の記憶や憧憬を形づくる音の要素が挙げられている。これには前述に挙げた行商や物売りが多くの地域を巡っていた当時の様子が伺えたり、静寂のなかにあってはじめて気づくことのできる音や、さらには雪がもたらす静けさそのものが音であるという回答は、会津地域のサウンドスケープの本質を表現しているように思える。

## 6. 音の収集調査—「ハレ」と「ケ」の調査研究

わが国では普段の生活・日常を「褻＝ケ」と呼び、祭事などを非日常として「晴れ＝ハレ」と呼び分ける習慣がある。会津地域のサウンドスケープを知る上でこのふたつのシーンを探ることは重要であると考えられる。現在のわれわれの生活がこの「ハレ」と「ケ」を共存させていた頃と無縁ではないが少しずつ変化しているのも事実である。今回のこの「ハレ」の調査でもそれは明らかであった。伝統を守りながらも様子はわれわれの今の生活をなぞりながら少しずつ変化を遂げているのである。しかし、一方ではかつての姿を確かに記憶している。それは伝統の形式や道具などではなく、そこで生活しながら伝統を守ってきた人々そのものが記憶なのだと思える。「ハレ」の調査では録音調査を主とし、会津地域の25の祭事を記録調査した。

また、日常的な普段の生活の音環境を調査するため「ケ」の調査では、平成18年6月26日から12月13日の期間、会津若松市の中心部（縦8km×横7km）を500mグリッドで区切り計224か所で録音調査と観察調査、騒音調査を実施した。

## 7. ヒアリング調査

ヒアリング調査は、アンケート調査、音の収集調査を通して得た情報をもとに会津地域に長く居住している方、聴覚障がい者の方から子供の頃の記憶などを話して頂いたことをまとめたものである。アンケート調査や音の収集調査の裏づ

けになる話、調査研究の今後の課題につながるようなさまざまな指摘を得ることができた。

なかでもかつての会津地域のサウンドスケープを形づくるのに重要な役割を果たしていたと考えられる行商(豆腐売り、初音売り、金魚売り、スイカ売り、焼き芋売り、トウモロコシ売り、はしご売り、竹竿売り、納豆売りなど)の呼び声や笛の音などの憧憬に残る「記憶の音」についてヒアリングすることができた。これはアンケート調査で得られた記憶に残るエピソードの自由記述でも数多く挙げられたものであった。これにより会津地域を巡っていた北陸地域や小名浜など浜通りの行商の姿を浮かび上がらせることができた。また、奥会津のマタギが使っていた言葉やごぜ(目などに障がいがあり地域を渡っていた人々の呼称)の人々が長い間受け継がれる歌を自分の人生観として歌う歌声がかつては聴かれたこと、奥会津の様々な自然のなかに気配を伝える音がしていた、など貴重な話を伺うことができた。

## 8. 会津地域のサウンドスケープ分析・問題提起-会津地域のサウンドスケープ構成音

グリッド調査とアンケート調査で裏付けられた会津のサウンドスケープ構成音は、自動車などの「車両の音」と、虫の音や鳥の鳴き声、木々のざわめきなどの「自然の音」である。グリッド調査においてこの2つの音を合計すると約8割を占めた。また、これらの音はアンケート調査においても、会津地域で生活する人によく聞くと認識されていることが分かり、これを裏付けをとることができた。アンケート調査から「自動車の音の特徴」としては、「騒音であると感じる人が多く」、また「普段の生活では気にしなくなっている音である」ということが挙げられている。「自然の音の特徴」としては、「昔よりも少なくなっていると感じる人が多く」、「意識して聴かれる音である」ということが挙げられている。この2つの音以外に人々の「記憶に残る音」も会津地域のサウンドスケープを構成する重要な音の要素であるといえることが自由記述で明らかになった。

聴覚は、それが鮮明な記憶に直結するという特徴を持っている。今回のアンケート調査やヒアリング調査でも「こんな音が心に残っている」といった話を多く聞くことができた。会津地域で生活する人の記憶に残る音は、豊かな自然の音や昔の行商の声、祭事のお囃子の音(ハレの音)などの人々の賑わいの音などが多かった。子供の頃に聞いたSLの音やお寺の鐘の音などもあった。3地域で調査を行った会津御詠歌も、その地域の人々の記憶に深く根付いていた。また、実際聞くことはないが、経験などから感じ取る気配の音(雪の音など)もこの中に入ると考えられる。

これら記憶に残る音について語る時、多くの人々がいきいきしながら話すということもとても印象的であった。しかし、最近の会津地域では商業化、観光化が重視されたため、自然の音と賑わいの音は聞こえなくなり、会津らしさが消えてきているという意見もよく聞く結果となった。アンケート調査では、42%の方が「無くなったと感じる音がある」と答えている。文化や地域と深く関わり、本当の会津を気づかせてくれる記憶の音は、これからの会津をより魅力的にするためにも重要な音の要素であると言える。

アンケート調査において「会津を代表する音」と質問したところ、「会津弁」、「自然の音」の次に多かった回答が「お祭りの音」であった。先にも記したように、祭りの音は記憶に残る音であると言える。会津地域では今でも多くの伝統行事が受け継がれ、その形式も非常に独特であった。一方で、スピーカーの利用や行事の商業化などで、その音風景が変わってきていることも確認された。

会津地域のサウンドスケープを構成する要素は「自動車の音」、「自然の音」、「記憶の音」である。この中でも「自然の音」を含む「記憶の音」は、人々が会津という地域で体験した音である。会津の伝統の中で受け継がれてきた、または会津の人々の感性によって感じられたそれらの音は、体験していないわれわれにもとてもいきいきと伝わってきていた。会津地方は都市部に比べ記憶に残る音がまだまだ残っている地域である。しかし、その音がしばしば自動車の音など、人工的な音にかき消されていることが今の会津の現状である。会津のサウンドスケープを構成するための魅力的な空間提案においては、道路を再配置し、会津の人々の記憶に残っている音を丁寧に拾い上げ、配置していくことが重要である。

## 9. サウンドスケープ調査研究をまちづくりに生かす-サウンドスケープ・デザイン提案

### まちづくり団体からのオファー

会津大町通りは、会津若松駅から南に鶴ヶ城を結ぶ商業地の大通りであり、現在でも江戸期や大正期の歴史的建造物が並ぶ会津若松市を代表する大通りである。会津大町通りでは、主に商店舗の経営を行っている女性を中心につくっているまちづくり団体「アネッサクラブ」が前進的な活動を行い、その名が知られている。昨年11月頃まちづくりに関する相談を頂いた。きっかけは北陸建設弘済会の研究助成でわれわれが会津地域のサウンドスケープを調査しているということを知ってということであった。「アネッサクラブ」からの依頼は3点で、第一は、かつて会津大町通りにスピーカーを設置して商店街全体にクラシックなどの音楽を流しているが通りとしての個性が出せていない、サウンドスケープで調

査した音源を流せないか、第二に平成19年度から通りをライトアップする計画がある、そのデザイン提案をしてほしい、第三に大町通りのまちづくりに関する講演を行ってほしい、というものであった。

この依頼を受けて会津大町通りの調査を行い、サウンドスケープを生かしたまちづくりの可能性についてデザイン提案を行うこととした。平成19年2月26日に会津大町通りアネッサクラブ主催の「アネッサ大学講座」において、「会津大町通りシークエンス再生」という講演テーマで会津大町通りの歴史を生かした街並みのシークエンス(\*1)再生計画について講演を行い、サウンドスケープを取り入れた街並み再生案をまとめたパネル、模型等の展示を行った。

\*1 連続的な風景を形成すること

## 10. 結び—まちの調律をめざして

本調査研究では会津地域のサウンドスケープについて、その基礎研究となる日常的な音風景と祭事などの非日常にみられる音風景の調査研究を行った。アンケート調査によって得られた結果は、会津地域の日常を形づくっている音風景の裏づけとなり、自由記述やヒアリング調査のなかでは、音風景は記憶と直結してわれわれのなかにいつまでも残っていくものであることが確認できた。

また、アンケート調査、録音調査、ヒアリング調査を通じて、会津地域が他地域と密接に関わっていたことをうかがい知ることができた。遠くは四国から伝播したと考えられる御詠歌や、福島でも太平洋側のエリアである小名浜から行商のために訪れていた物売り、北陸からやってきた農業開拓や大工、鍛冶職人の人々。これらの人々がかつての会津地域の音風景を形づくり、現在まで受け継がれているものがあることが分かった。

われわれの普段の生活では東京などの都市部と同じように車両の騒音が生き物や自然の僅かな音を掻き消して、今ではわれわれの周りを席卷していることが明らかとなった。会津若松市内ではその騒音値は東京に匹敵するほどであった。ところがわれわれはこのような車両の音は意識から排除して生活していることがアンケートによって分かった。日常生活を通じて車の音には鈍感になり、自然の音には敏感になるという使い分けをしている場合も見受けられた。しかし、自然の音については「かつては聞こえたが最近では聞かなくなった音」としても認識している。実際、市街地では田畑が住宅地にとって代わり、かえるの鳴き声などが減ったのは確かである。しかし、騒音値の高い車の音を取り除くと、野鳥や虫の音を聞くことができるエリアが会津の周辺地域には数多くあることが録音調査を通して分かってきた。

われわれは生活のなかで何かしらは音は意識している。ところが都市計画やまちづくりでは今までほとんど音のことは考慮されていなかった。一点、騒音という公害としては意識されてきたとはいえる。しかし、われわれの身の回りにある音は環境であり、生活空間を構成している重要な要素であることは間違いない。それは音に対する記憶と風景の記憶が深く結びついている点で明らかであるといえよう。都市計画やまちづくりでは自然を排除して開発を行うことによって成り立つ部分が多々ある。しかし、そのなかでも音という要素に注目して騒音という概念だけではなく、風景を構成するという点で音に注目する必要があるだろう。

今回、われわれが調査対象とした会津地域は歴史的な地域であり、蝶などは絶滅種がわが国でも唯一生息する地域でもある。この文化と自然の保存を今後はどのように進めていくかということが重要な課題であると考えられるが、これを行っていくことで実は音風景も同時に守られていくことになる。また、一度成長を止めて空洞化を起している街並みのなかで、それを修景する手段となるのがサウンドスケープの概念にはあると言える。音に焦点を当てて街並みの修景や整備を考えていくと、結果的には文化を守り、緑を設け、人々の賑わいを生む広場などを設置する提案に結びついていくのである。サウンドスケープという概念をまちづくりに導入し「まちの調律」を行っていくことは、結局はわれわれの身の回りに生活を豊かにする本来のものを呼び戻すことになるに違いないのである。